

私が好きな歴史と民俗の博物館

高度経済成長期の便利家電

今回私は「私が好きな歴史と民俗の博物館」というテーマの中で、第9室で行われている、高度経済成長期に登場した家電の展示について紹介します。

当館の第9室には明治時代から現代までの博物館資料が時代の流れに沿って展示されています。令和3年(2021)6月現在、昭和時代の後期にあたる場所では「電熱式ラーメン鍋」や「ゆで卵器」などの、高度経済成長期に登場して生活を便利にしていた家電を見ることが出来ます。

日本では太平洋戦争が終戦してから10年後の昭和30～32年(1955～57)に「神武景気」という大型景気を迎えます。この神武景気を皮切りに景気の良い時代が続き、昭和30～48年(1955～73)にかけて日本経済の規模が飛躍的に拡大しました。この期間の事を「高度経済成長期」といいます。

高度経済成長期の中で日本の経済や技術力が成長していくのと同時に国民の生活様式も変化していき、生活を豊かにする新しい家電が姿を見せるようになりました。



日立ラーメンなべPC-310 (当館蔵)

この写真は昭和30年代に日立から発売された電熱式のラーメン鍋です。ホーローの鍋と電熱器がセットになっており、即席ラーメンを食卓や机の上で手軽に作る事が出来ます。

昭和33年(1958)に世界で初めて「チキンラーメン」が発売されたように、高度経済成長期にはインスタントの食品が増えていきました。そのため、調理の手間が軽減されるような便利家電が次々と誕生し、家事の省力化が進んでいったのです。

また、第9室では同じく高度経済成長期に登場した、「三種の神器」と呼ばれたテレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫をはじめとした大型の家電の展示も行われています。ここでは写真の^{たらい}盥・洗濯板と電気洗濯機のように、三種の神器が登場する以前に使用されていた道具が並べて展示されており、生活様式の変化を比較して見る事が出来るような展示構成になっています。



左：^{たらい}盥・洗濯板(当館蔵) 右：電気洗濯機(秩父市蔵)

これらの家電の展示は、今となっては生活に当たり前のように溶け込んでいる様々な家電が昔ほどのような形であったのかを知る事が出来るほか、技術の進歩過程や生活が便利になっていく過程を見て学びを深めたり、また昔実際にこの時代の家電に触れていた場合は懐かしさを感じたりと、人によって違う感じ方・楽しみ方が出来る展示です。興味をお持ちの方は是非、足を運んでみてください。

実習生 N. T

私が好きな歴史と民俗の博物館

誰も一度は、埴輪^{はにわ}を見たり聞いたりしたことが、あるでしょう。埴輪といえば、ぽっかりと目と口に穴の開いた、人の形のものを想像する人が多いのではないのでしょうか。埴輪は、副葬品として古墳^{こふん}の周りにたくさん並べられていた焼き物です。古墳とは、3世紀後半から7世紀にかけて造られていた、王や力を持った人たちのお墓です。埴輪には、埋葬された死者の魂を守ったり、鎮めたりする役割がありました。形は人物形以外にも、動物形、円筒形や壺形、かぶとや盾、道具の形、船形、家形など様々なものがありました。

今回、私の好きな展示資料として紹介するのは、様々な形の埴輪の中でも、馬の形をしたものです。飾馬埴輪^{かざりうまはにわ}、古墳時代後期^{こふんじだい}（約1450年前）県立史跡の博物館所蔵で、伝児玉町（現本庄市）から出土したものと伝わっています。大きさは体高が94cm、体長が89cmあり、大型です。埼玉県指定の有形文化財となっています。粘土を焼いて造られており、茶色っぽいオレンジ色をしています。

乗馬の風習は5世紀頃に、朝鮮半島から伝わりました。移動手段だけでなく、荷物の運搬や人と人との通信、農作業、兵力としても馬は活躍しました。そのため、この頃の古墳からは飾馬埴輪のような馬の埴輪だけでなく、副葬品として馬具が見つかりました。飾馬埴輪が出土されたということから、埼玉でも馬が盛んに飼育されていたことがわかります。

4本足でしっかりと立ち、前を向いています。足は太く、一定の太さで、柱のように長くそびえ立っています。足も含め、胴体や頭は円筒のようになっており、頭は空洞になっていることがわかります。空洞の様子は、口や目の穴から見ることもできます。右目から左目の先の展示を覗くこともできます。よく見てみると、穴は他に鼻や耳、首元、お尻の部分などにも空いています。これらの穴は透かし^す孔^{あな}といえます。空洞になっている中まで、しっかりと焼くことができるという実用性もあります。飾馬埴輪を様々な高さ、角度から見ると、透かし孔がたくさん空いていることに気が付きます。

そしてこの埴輪の名称からもわかるように、たくさんの飾りが施されています。現在もよく見る、人が馬を操るための手綱^{たづな}やそれを支える轡^{くつわ}、乗っているときに足を置く鐙^{あぶみ}などもあります。それらの実用的な馬具以外にも、たくさんの装飾的な馬具が表現されています。額に付けられた面繫^{おもがひ}、胸元に3個の鈴が取り付けられた胸繫^{むながひ}、同じように鈴の付けられた尻繫^{しりがひ}などがあります。牧場などではあまり見ない、華やかな装飾です。古墳時代の馬たちは、このような華やかな馬具を身に着けていました。

飾りと馬の体の色が同じことから、馬の体と同じく粘土で飾りも造られていることがわかります。馬の胴体に新しく飾りの形を造ったものを乗せたり、馬の胴体そのものを削って模様のようにしたり、様々な方法で表現しています。手綱や胸繫は素材を追加し、盛り上げて造られているのがわかります。大きい飾りや、厚みを感じられます。一方、障泥^{あおり}という馬の背中にかけている布や、そこに施された細かい線は、馬自体を引っ掻くようにして描かれています。障泥が薄いものだということや、そこに模様があることがわかります。これらの装飾やその表現が丁寧に施されており、当時の馬の装飾がどのようなものだったかがよくわかるため、飾馬埴輪と呼ばれています。



飾馬埴輪伝児玉町
(現本庄市)出土
古墳時代後期
県立史跡の博物館蔵

実習生 K. T

ゆめ・体験ひろば

歴史と民俗の博物館は、常設・特別展示のほかに教育普及事業の一環として多様な体験学習を行っています。3つのエリアに分かれる「ゆめ・体験ひろば」は、それぞれに特色を持つ体験プログラムを通して郷土埼玉の歴史や文化を学ぶ場所を提供しています。

「ゆめ・体験ひろば」は無料開放エリアとなりますので、お気軽にお立ち寄りいただけます。

※体験内容によっては材料費や事前予約（新型コロナウイルスの感染拡大防止対策）が必要となります。

昭和の原っぱ

第3エリアの昭和の原っぱは、ベーゴマやメンコなどの昔の遊びを体験*できるほか、現在では見ることのない駄菓子屋や鋳鉄製のポスト、土管など昭和30～40年代の雰囲気や再現した屋外のエリアとなっています。ここでは、昭和の雰囲気や季節に応じて、「射的遊び」や「ポン菓子づくり実演」などのイベント*も開催しており、当時小学生だった団塊世代の方々と現代のIT世代の小学生が遊びの文化の継承を通じて世代間交流ができる場所となっています。

※現在は新型コロナウイルス感染拡大防止対策により、遊具やイベントは休止しています。見学のみ可能です。



昭和の原っぱ

台など様々な遊具が設置され、それらを利用した遊びが楽しまれています。しかし、昭和30年代ごろの公園はいわゆる原っぱで整備されておらず、土管が置かれているだけでした。当時小学生だった団塊世代の人々は、土管に登ったり、秘密基地にして自分だけの邪魔されない場所を楽しんでいました。



土管

このように昭和の原っぱを象徴する“土管”は、なぜ原っぱに置かれるようになったのでしょうか。

実は、水洗トイレの普及に関連づくものだと考えられています。大正12年（1923）の関東大震災の復興を契機に下水道の工事が進められていました。そして下水道の環境が整うと同時に、今まで汲み取り式だったトイレは水洗式に入れ替わるようになりました。その後、全国的に下水道・下水処理場の工事が行われ、建設業者の資材だった土管のうち、余った数本が各地に置かれていったということです。（「土管 日本の近代化を支えた土台」、『朝日新聞』、2013年5月11日朝刊）

現在は安全管理上の問題で撤去され、公園などで見かけることはありませんが、この昭和の原っぱで、是非体験してみてください。

実習生 H.M

原っぱに土管がある理由は？

現在、子どもたちが遊ぶ公園にはブランコや滑り

博物館のものづくり体験

埼玉県立歴史と民俗の博物館のゆめ・体験ひろばでは、「郷土に伝わる伝統文化のわざとこころを、ものづくり体験を通して学ぶ」ことを目的にさまざまな体験学習を行っています。ゆめ・体験ひろばエリアのものづくり工房では、通常体験メニュー*として「藍染めハンカチづくり」「まが玉づくり」「江戸組紐ストラップづくり」があり、実際に作ることで楽しみながら学べる場を提供しています。

*現在は電話による事前予約(日時指定)が必要となります。予約に空きがある場合は、当日申込による体験が可能です。



埼玉県の藍染め

藍染めは、インディゴ(藍色に染める色素)をもつ植物を染料として用いた染物です。遣隋使によって7世紀頃に日本に伝わったとされ、江戸時代の中頃になると、埼玉県でも藍染めが盛んに行われるようになりました。本庄・深谷・羽生・妻沼などの県北部では、糸の段階から染める「糸染め」が行われ、八潮・草加・越谷・川口などの県東南部では、型付けした後に布を染める「型染め」が行われるようになりました。地域によって主流となる技法に違いがあるのも埼玉県の特徴です。

また、藍色に染色されないように作業を施して模様を作る防染という作業にも種類があります。糸の段階で文様にしたい部分をあらかじめ染色されないように保護して染める「拵括り」のほか、京友禅でお馴染みの「友禅染め」もこの防染と呼ばれる作業なのです。

実は博物館にも...

ゆめ・体験ひろばエリアのものづくり工房には、昭和の原っぱという無料屋外スペースが隣接しています。昭和35~45年(1960~1970)の雰囲気再現したスペースで、藍染めハンカチづくりの体験でも、染色後に水ですすいでから乾かす作業で利用しています。そんな昭和の原っぱには、実は藍染めで使用されている藍が栽培されています。蓼藍たであいといわれるタデ科の植物で、日本では伝来後に一般的に利用されてきました。昭和の原っぱにお越しの際は、探してみてください。



世界に1つのハンカチづくり

ものづくり工房で体験できる藍染めハンカチづくりでは、「絞り染め」といわれる防染の作業と、藍甕あゐ(染料の藍汁をためておくかめ)を使用して染める染色の作業を体験することができます。絞り染めは、布の一部を絞って糸などで括ったり、折り畳んで括るなど、染まらない部分を作って染色する技法の全般を指します。ものづくり工房では、割り箸や輪ゴム、洗濯バサミを使用して、自分好みの模様を作ることができます。また、同じ模様であっても絞り具合や藍汁の揉みこみ具合などで、完成したハンカチの色味や風合いに違いがでてきます。藍染めは最初から最後まで人の手で作業をするため、全く同じものはできないのです。お子様はもちろん、大人の方も楽しみながら伝統文化に触れられる体験となっています。歴史と民俗の博物館で世界に1つしかない藍染めのハンカチづくり、ぜひ体験してみてください。

実習生 N.H

私が好きな歴史と民俗の博物館一旅の展示一

最近、旅行に行きましたか。新型コロナウイルスの影響で旅行に行った人は少ないのではないのでしょうか。そこで今回、旅に想いを馳せてほしいと思い、旅に関する展示を紹介します。

当館では常設展示室第7室において江戸時代の埼玉における支配の特色を、大名・旗本などの領主とその農民支配の在り方、交通・宗教、文化などの制度を通して紹介しています。その中には「庶民の旅」と題した展示を行っています。それでは江戸時代の人々の旅について垣間見たいと思います。

旅の必需品

江戸時代中頃になると、江戸・大阪・京都を中心に各地の城下町を結ぶ街道が完成します。特に東海道・中山道・甲州道中・日光道中・奥州道中の五街道の整備により、旅が流行します。

まず、必需品の一つに「手形」です。当時は、交通の要所に関所が設けられ、通過するためには、手形の提示を求められました。

他にも旅の必需品として、くし、耳かき、ヤスリ、握りばさみ、小刀、千枚通しといった道具類を持ち歩いていました。また大きさに注目してみると、少し小さめに作られています。



道中小物入

当時の旅は長期間であるため、荷物がかさばるのを少しでも防ぐため、モノの大きさ自体をコンパクトにし、携帯しやすくしました。他にも携帯用筆記具である矢立、算盤、磁石、枕、銭刀、印籠、燭台、提灯などを携帯していました。

街道と交通手段

陸上交通が整備されたことによって、街道には一定の間隔で宿場が設けられました。例えば、東海道である品川から大津までの間には53宿がありました。また、宿場には大名らが宿泊に利用する本陣・脇本陣と一般の旅行者のための旅籠屋などが並びました。交通手段も徒歩・馬や駕籠といった乗り物を使い分けていました。

旅の記録

旅に行った人たちはその記録を様々な形で残しています。当館では旅の様子を表すものに、中津川の変わり図を含んだ日本橋から大津まで71枚の大判錦絵「木曾街道六十九次」があります。溪斎英泉・歌川広重の二人が描きました。そのうちの「支蕪路のノ駅浦和宿 浅間山遠望」が展示されています（展示替あり）。



支蕪路のノ駅 浦和宿 浅間山遠望

いかがでしたでしょうか。少しでも旅に想いを馳せていただけましたら、幸いです。

実習生 A. K

私が好きな歴史と民俗の博物館

第6室「板碑—武士の心—」のすすめ

埼玉県立歴史と民俗の博物館は県内の歴史と民俗に関わる資料を収集、調査、展示しています。第1室から第10室まで異なるテーマで展示をしていますが、その中で私は特に第6室「板碑—武士の心—」の展示が気に入っています。

板碑は板石塔婆とも呼ばれる鎌倉時代中頃から戦国時代にかけて、石で造られた塔婆です。板碑は日本全国で造られていましたが、関東地方、特に埼玉県内に多く現存しています。埼玉県内に見られる板碑は荒川上流の長瀬や槻川流域の小川町下里から産出する緑泥石片岩と呼ばれる石でできています。

この板碑について埼玉県立歴史と民俗の博物館では第6室で学ぶことができます。



第6室のようす

第6室では約25基の板碑を展示しています。そこでは一般的な形の板碑の他に特徴のある板碑も展示されています。

特徴のある板碑としては日本最大といわれる長瀬町にある地上537cmの釈迦一尊種子板碑と、銘が確認できる中で日本最小である鴻巣市にある阿弥陀一尊種子板碑が並んで展示されています。

また、板碑では造立者が供養の対象とした仏や菩薩を梵字(種子)で表しただけではなく、年月日、造立の趣旨や目的なども記されており、文字資料としても注目されています。埼玉県立歴史と民俗の博物館にも武蔵七党の事跡が記された板碑が複数展示されています。

さまざまな板碑が展示されている中で、特に私が気に入っている板碑は板碑造立の末期に造られた板碑です。末期の板碑には現代でも見られる卒塔婆が彫られていることがあります。特に第6室の入口に一番近い場所で展示されている板碑には複数の卒塔婆が横に連なって彫られており、それぞれの塔婆の形がとてかわいらしいです。



第6室入口近くにある末期の板碑
(当館蔵複製)

これら板碑の展示をより楽しむために欠かすことのできない存在が展示ボランティアの方々です。板碑について展示ボランティアの方々が丁寧にそして面白く解説してくださるため、ぜひ一度足を止めてみてください。

第6室は他の展示室とは異なり、大きく開かれた窓がある明るい展示室です。板碑は歴史の教科書に大きく取り上げられることもほとんどないため、埼玉県立歴史と民俗の博物館で初めてその存在を知り、目にする方もいらっしゃるかもしれません。もしよろしければ、明るい展示室で大きさも彫られた内容もさまざま個性豊かな板碑をじっくりと眺めてみてはいかがでしょうか。

実習生 E. K

私が好きな歴史と民俗の博物館

この度はコロナ禍の中博物館実習に参加させていただき、埼玉県立歴史と民俗の博物館について、博物館の役割だけでなく、地域への取り組みなど多くのことを学ぶことができました。

ここで、実習を通して私が好きな博物館の見どころについていくつかご紹介したいと思います。

◆ものづくり工房◆

ここでは埼玉の伝統的なモノづくりの体験をすることができます。体験メニューは、まが玉、藍染めハンカチ、組みひもストラップ・ブレスレットの三種類があり、年齢を問わずだれでも楽しめる内容になっています。コロナ禍による感染防止対策で、事前予約や人数制限などを行ったうえでの体験ではありますが、安心して十分満足できるものづくり体験ができます。

体験スペースは室内一面が開放的なガラス張りになっており、大宮公園の豊かな自然の光が差し込み、心地よい空間になっています。また、かわいらしくも、どこか懐かしい雰囲気の昭和の原っぱを一望でき、ゆったりとしたひと時を過ごすことができます。

職員の丁寧な解説と指導があるので、どなたでも簡単に作品づくりを楽しめます。伝統的・本格的なものから世界に一つのユニークな作品まで自由に作成できるので、ものだけでなく、素敵な思い出もつくることができます。

◆昭和の原っぱ◆

こちらは1960年～70年の昭和の雰囲気を再現したスペースで、今ではなかなか見ることのできなくなった手押しポンプや土管、丸い郵便ポスト等が設置されています。



公園や遊具がどんどんなくなり、遊びといえばゲームやスマホが主流となってきている現代ですが、こちらのエリアでは、地域の人と交流し、メンコやベ

ーゴマ等で遊ぶことができます。世代を超えて昔ながらの遊びに熱中できる暖かな交流の場です。昭和の懐かしく、居心地の良い空気を感じられるので、童心に帰って楽しんでみてはいかがでしょうか。

◆第一室常設展示室◆

当博物館では、旧石器時代から現代・民俗資料まで時代ごとに計10室の常設展示を見学することができます。その中でも、私は今回の実習で、第一室について見学や提案を多く行ったので、こちらでご紹介したいと思います。

第1室では旧石器から弥生時代の展示を見学することができます。埼玉県内でも非常にたくさんの遺跡から土器や石器などが出土しており、実際に目にすることができます。壁一面に展示された土器から長い時代を感じることができ、圧倒されます。



(第1室内のジオラマ)

また、こちらの展示室には丸木舟で漁をする古代人のジオラマをみることができ、展示物だけではなくなかなか伝わらない、生き生きとした、臨場感あふれる様子を見ることができます。

当時の人々が実際に使っていた様々な道具や住居の形をみて学ぶことができ、遙か昔に私たちのご先祖様がどういった生活を送っていたのか知ることができます。同じ埼玉という地で栄えた過去に思いを馳せてみてください。

実習生 M. I

私が好きな歴史と民俗の博物館

私はこの度、埼玉県立歴史と民俗の博物館で実習をさせていただき、博物館施設や館での役割を担う学芸員の業務について理解を深める貴重な経験をさせていただきました。

歴史と民俗の博物館では、ゆめ・体験広場/ものづくり工房にて製作体験を実施していますが、私も実習の一環として製作体験を行いました。その中でも藍染が印象に残っています。大学では被服学を学んでおり、藍染については少々触れていたのですが製作体験を通すことで改めてジャパン・ブルーの味わいある色味にすっかり魅了されてしまいました。

そのような経緯から藍に纏わる資料についてご紹介したいと思います。



藍染のハンカチーフ (ゆめ・体験広場にて撮影)

10 室民俗展示室に入り、左奥の展示ケースでは藍に纏わる資料が数点展示されています。どの資料も藍染を理解する上で重要ですが、ケース中央に配置されている「藍染絵馬」(熊谷市有形民俗文化財)は江戸時代の藍と人々の関わりの様子が見て取れる興味深い資料です。歴史と民俗の博物館に展示されている藍染絵馬は複製資料となっており、原資料は熊谷市下川上にある宝乗院愛染堂ほうじょういんあいぜんどうに所蔵されています。

「藍染絵馬」が奉納されたとされる江戸時代は自給的農業から商業的農業に移行していったことで三草四木(三草=麻・藍・紅花、四木=桑・茶・楮・漆)の生産が主要になったことや、以前は中国から輸入していた木綿の生産が国内でも栽培され、江戸時代以降、木綿の栽培が急増したことで衣料素材が麻から綿に移行した(いわゆる衣料革命が起こった)時代であり、それに伴い藍染染料の需要も拡大しました。



藍で染められた農作業着

日本の藍といえば徳島県の阿波藍が著名ではありますが日本各地に於いてもその生産は広がり、埼玉県の藍染としては武州藍染が主要となりました。武州藍染で有名な行田、羽生、加須等の埼玉県北部は利根川(日本三大河川の一つ)が流れており、藍の生産が普及しました。藍染絵馬が奉納された宝乗院藍染堂も埼玉県北部の熊谷市に位置していることからその恩恵に与り、寺院のある星宮地区は利根川水系の星川(一級河川)等の流水があり、水資源に恵まれていたため染色業が盛んであったとされています。そして、この「藍染絵馬」はそのような藍を扱う紺屋等の染色業者が技術の向上や商売繁盛を願って寺院に奉納した絵馬です。熊谷市指定有形民俗文化財に登録されている「愛染明王像」はこの信仰の対象であり、サンスクリット語で「ラーガ=染付け」という意味が元にあったことや「愛染=藍染」と語呂合わせて解釈できることから染色業を始めとした人々に信仰されてきました。そのように信仰という形で人々の間で受け継がれていったことから民俗的資料価値のある大変貴重な資料であることが分かります。

なお、宝乗院藍染堂のように愛染明王を本尊としている寺院は日本各地に存在しており、基本として同様の御利益があるとされることから各地の染色業の人々は一定の区域にある愛染明王を信仰の対象とし、何らかの奉納をしていたと思われます。

なお、紹介資料は撮影禁止となっていますので資料の写真は掲載していませんが是非、第10 室民俗展示室をご覧ください。

実習生 M. C

私が好きな歴史と民俗の博物館

懐かしの駄菓子屋さん



実習生 T. I

駄菓子屋の起源は江戸時代に町の入り口を見張る仕事をしていた「番太郎」という人物が始めたのが始まりでした。「番太郎」は見張り番の仕事のサイドビジネスとして、当時、庶民の間で安価で使われていた黒砂糖を使った「安いお菓子＝駄菓子」を売り始めました。それからこの商売は繁盛し、江戸の庶民の間食として食べられるようになりました。

昔のころによくあった駄菓子屋さん、現在21歳になる私も小学生の時に放課後よく友達とおこづかいの500円や100円を握りしめて行っていました。ですが、最近では町から駄菓子屋はあまり見かけることはなくなってしまいました。そんな駄菓子屋の展示は当博物館の「昭和の原っぱ」にて展示しており、他にも昔ながらの展示物もありますので、昔を思い出しながら当博物館でどうぞお楽しみください。